



「見たり、聞いたり、探ったり」No.304

通算 No.455

青木行雄

2025年、大阪・関西万博「日本国際博覧会」
関西パビリオン、和歌山ブース。

「2025年7月6日～19日」(柏木白光書道展)

「熊野古道をめぐる書巡礼」を見学する。

万博No.2

長年お世話になっている書道家「柏木白光」氏が関西万博に出展すると聞き、初日に合わせて7月6日に会場に参上し、重ねてまたまた万博を堪能した。

書家・柏木白光氏は、国内外の聖地^{おもむ}に赴き書作品を制作し、精力的に展覧会を開催してきた。2009年(平成21)から熊野古道をテーマとして作品制作を開始。熊野へと通じる参詣の路を歩み、人々の祈りの場である紀伊半島の聖地を書巡礼してまわる。

それぞれの地において、そこに宿る聖なるものと対話し、舞い降りた想いを筆と墨と紙で昇華する。13年の歳月をかけ、神社仏閣をはじめ89ヶ所の聖地において制作を続けてきた書作品の集大成が「天と地」であった。

2025年(令和7)7月6日(日)～19日(土)、大阪万博関西 和歌山ゾーンにおいて、熊野三山と高野山をテーマにした代表作、その内の11点が特別展示された。

第1部 4作品が展示。7月6日～12日

第2部 7作品が展示。7月13日～19日

第1部の4作品を鑑賞して来た。



大屋根リング20mの上から外側を写した関西パビリオンの建物、まだ早かったので人影は少ないが出る頃はいっぱいだった。



関西パビリオン入口ですが、大変混雑して来ました。

柏木白光の言葉

伝統的な書の美しさと、色彩感覚や絵画的要素が融合した「墨アート」を展開。さまざまな一流アーティストや最新のテクノロジーとも共演し、日本の歴史や伝統、精神世界の素晴らしさを世界中に発信することに挑戦していると明言。

略歴

大分県中津市生まれ。書家であった初代・辛島寅次郎、2代・宇都宮廣の跡を継ぎ、5歳から書の道へ、毎日女流展(1988年(昭和63)グランプリ受賞)など多くの書道展に入賞、以後毎日女流展審査員など歴任。1992年(平成4)成田空港のロビーに「般若心経」7メートルの大作を制作。

音楽家とのジョイントで書を揮毫するという海外公演も多く、ハワイ、ロサンゼルス、イスラエル、モンゴル、ネパールなど世界各地で公演。フランスのオペラ座にも出演した。国内では、郵政公社、青年会議所などのイベント出演やシンセサイザー奏者・喜多郎、笛奏者・藤舎名生らミュージシャンとのコラボレーションも多く共演。

また一方、伊勢神宮、明治神宮、靖国神社などに作品が奉納されたほか、イラク自衛隊の看板「サマーケ宿営地」を書き話題となった。1998年(平成10)、創作活動から得た書のエッセンスを伝えるために「心



柏木白光氏ご本人。笑顔ですが、書に向うときは、鬼面の顔をしている。



題は「翔夢」(しょうむ)作品サイズ、縦90cm、横140cm。全体の寸法 112cm×168cm。



会場に並ぶ4点の風景。左から①「熊野の観音菩薩」②「蘇りの聖地」③「神船」④「翔夢」の4点。



建物の影が写り良く見えないが風景に字「ふりむけば蒼天がある」とかかっている。



関西パビリオンの近くの大屋根リングの上部、木板をはりつめた歩道で上下段の大屋根リングで全部の幅が30mある。



東ゲートから入場し一番正面にあるパビリオンが左から「フランス館」真ん中が「アメリカ館」右が木を使った「フィリピン館」です。大屋根リングの上から写す。



関西パビリオンのすぐ近くの大屋根リングの下の部分、上から見ると大きさが良くわかる。



この大屋根リングは中々迫力があります。東ゲートから入場し、リングの中から写す。

の癒し研究所」(群馬県高山村)を設立した。

2006年(平成18)、2009年(平成21)と東京銀座で個展を開催し、土地の風や匂いを感じた時にほとぼしる言葉に確かな技術が結晶し、独自の「墨アート」の世界を表現した。

2011年(平成23)、沖縄護国神社の記念碑の美智子皇后陛下御歌を揮毫^{きこう}。また東日本大震災復興のプロジェクトも積極的に行い、2012年(平成24)にはニュージーランド、クライストチャーチの震災と東日本大震災の復興の橋渡しも行った。

2009年(平成21)からは熊野古道をテーマにした作品制作を開始、2014年(平成26)1月にはその集大成となる展覧会「天と地～熊野へ捧げる書巡礼～」を開催した。現在も野山へ旅して大地のメッセージを受け、詩や墨絵を描いた書作品を創作し、新しい世界観を表現し続けている。

こんなわけで、国内のパビリオンは大屋根リングの外側にあって、東ゲートより入場して右側に歩いて5分程の所に、この関西パビリオンはあった。白光氏は、初日の為に記者団の会見や撮影等忙しく飛び回っていた。午前10時過ぎに会場に着きすぐにお会い出来て会場を案内してもらい短時間だがお話が出来た。大変喜んでいただき、感動した。白光氏の活躍は前記の通りだが、この世界的な国際博覧会にこれ程のスペースで11点もの作品が出展された事は大変な出来事だとあらためて素晴らしい実力に重ねて感動である。

令和7年7月20日 記